

令和 4 年 6 月 5 日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00067

研究課題名(和文) アヴァダーナとパンニャーサ・ジャータカの起源と流布に関する研究

研究課題名(英文) Study of Avadana and Pannasa-Jataka

研究代表者

引田 弘道(Hikita, Hiromichi)

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号：00192287

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではカシミールに広まった有部系のアヴァダーナ文献と、東南アジアで写本が発見されつつある『パンニャーサ・ジャータカ』という文献群を核としながら、インド北部からチベットや中国の雲南地方を経て東南アジアに至るまで、各地に残る遺跡などを参照しつつ、文献相互の関係性と、仏教の流布状況の解明を試みた。新型コロナウイルスの蔓延によって海外の調査が制限されたが、アヴァダーナ文献の翻訳と解明は飛躍的にすすみ、成果をまとめて書籍を刊行するまでに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

説話文学を中心としてその伝播のルートを探る先行研究は、個々の説話の源を探る研究が中心で、本研究のように、複数の成立地における異なる文献を対象とする研究はこれまでにはない。さらには、特定の文献を典拠にする絵画作品を研究対象とすることで、複数の視点を得ることができ、両分野においての解明がなされた。成果として『アヴァダーナ・カルバラター』という文献の翻訳と研究をまとめた論考を発表した。まとまった形での書籍の刊行は国内外において本書が初めてとなる。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the texts of Buddhist narratives, mainly focusing on the Pannasa-Jataka and the Avadana-Kalpalata. The chapters from 26th to 38th and the forward of the Avadana-Kalpalata were translated to Japanese and studied by comparing the descriptions among other texts. The chapters translated and studied to this point include the same narratives in the groups of texts of the Mulasarvastivada.

研究分野：仏教学

キーワード：仏教説話 アヴァダーナ パンニャーサ・ジャータカ ジャータカ 仏教説話図

1. 研究開始当初の背景

カシミールに広まった有部系のアヴァダーナ文献から、東南アジアで写本が発見されつつあるパンニャーサ・ジャータカという文献群を核としながら、仏伝文学が如何に広まっていったかを総合的に研究する。本生譚を含んだ仏伝文学は、仏教が流布する上で最も重要な要素と捉えている。経・律・論の三蔵が僧という聖職者集団のためのものであるとすれば、仏伝文学は仏教信者の信仰の拠りどころであると考えられる。この見地が研究開始当初の、本研究に関わる研究者たちの共通の認識である。

カシミールに起源をもつ有部系の物語は大乘仏教にも大きな影響を与えつつ、おそらく6世紀から11世紀頃にチャオプラヤー川流域にあったドヴァーラヴァティー国へと伝播したと仮説を立てる。それはスリランカ所伝のパーリ仏教がこの地に入る以前のことである。その流通経路の拠点としてチベット、ミャンマー北部、雲南、タイのチェンマイが挙げられる。本研究では、アヴァダーナとジャータカ、『賢愚経』・『六度集経』などの漢訳經典の比較考察、各地に残る仏教絵画、仏像、遺跡の比較研究、さらに拠点地域の現地調査を通して、有部系の仏伝文学の伝播経路を考察する。

2. 研究の目的

本研究は、ジャータカ(本生譚)とアヴァダーナ(譬喩譚)が、インド北部からチベットや中国の雲南地方を経て東南アジアに至るまで、どのように流布していったかを、その中継地点に伝わる文献を中核とし、また各地に残る遺跡などを参照しながら、解明することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) カシミールなどのインド北部の有部系の説話に関する翻訳、研究

『ディヴィヤ・アヴァダーナ』と『アヴァダーナ・カルパラター』を翻訳し、北西インドでどのような物語が成立していたかを明らかにする。またこれらを典拠とする美術作品の分析し、文献と絵画においてどのように物語が表されているかを解明する。

(2) チベットに伝わる翻訳文献とチベット人の著作となる文献および絵画に関する翻訳、研究

蔵訳『アヴァダーナ・カルパラター』とランジュンドルジェ編『ジャータカ百話』の翻訳研究を行うことで、インドで成立した文献がどのようにチベットで受容されたかを解明する。またこれらを典拠とする美術作品の分析を行い、絵画での表現方法と説話文献の受容状況を考察する。

(3) 東南アジア各地に伝わる本生譚に関する翻訳、研究

『パンニャーサ・ジャータカ』の翻訳研究を行い、東南アジアに伝わる様々な説話の集大成である文献の解読につなげる。東南アジアに伝わる写本やその系統も明らかにする。

(4) 現地調査および資料収集

現地調査の対象と方法は以下の通りである。

①『パンニャーサ・ジャータカ』が所蔵されるタイのバンコク、チェンマイにて写本資料の現地調査と資料収集、寺院壁画の資料収集(写真撮影)を行う。

②中国・北京市内において写本が所蔵される博物院、研究所、寺院での絵画と文献資料の調査を行う。

③インド・デリーとネパール・カトマンズで博物館などの所蔵の絵画作例と写本の調査を行う。

④資料収集と現地調査で得られた成果を共通のリファレンスとし、文献とそれに関する美術などのクロスリファレンスを構築し総合的に分析・研究する。

4. 研究成果

本研究の成果として、書籍を刊行した(下記引用文献)。上記の研究方法で挙げた個々の項目の成果は書籍にまとめられている。本研究で得られた具体的なデータや翻訳文は下記の文献を参照されたい。ここでは本研究の中核をなす、『アヴァダーナ・カルパラター』について得られた知見の概要を示す。

(1) 『アヴァダーナ・カルパラター』について

『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』「菩薩伝の如意の蔓草」(本報告書では『アヴァダーナ・カルパラター』とする)と訳される本作品は、11世紀のカシミールの詩人クシェーメンドラ(Kṣemendra)によって著された仏教説話集成である。本作品は美文作品(カーヴィヤ, kāvya)であり、108章からなる。最後の第108章はクシェーメンドラの息子であるソーメンドラ(Somendra)が吉祥の数を満たすために書き足したものとされる。本作品を評して、「自己犠牲に対する仏教の傾向がここでは著しい精巧さをもって最高潮にまで導かれ、業の教義が非常に不器用に適用せられ、ついには道義がそのように誇張したやり方で強調されているので、説話はしばしば望む結果と反対の方に行ってしまう」と、全体として、洗練されたとは言いがたいと評価されたことがある。こうした記述にも見られるように、クシェーメンドラは仏教詩人としては二流の詩人だというのが一般的な評価のようである。し

かし、クシェーメンドラが、美文作品に特徴的な、写実的な詩文を本作品に加えるなど、美文作品の伝統を重んじ、ヒンドゥー教徒読者を意識した著作をなしていることもまた事実である。したがって、『アヴァダーナ・カルパラター』という作品を仏教説話文学という観点からのみ評価することには慎重にならなければならないと考える。

(2) 『アヴァダーナ・カルパラター』の材源について

『アヴァダーナ・カルパラター』はブッダと彼の弟子たちの物語を美文詩の文体で要約した作品であるが、その材源となった物語をどの仏教部派が伝えていたかという問題を解明しようとする試みはこれまでもなされている。『アヴァダーナ・カルパラター』所載の説話が上座部系根本説一切有部の律蔵に伝えられている説話と近いことは早くから指摘されてきた。例えば、『アヴァダーナ・カルパラター』を構成する108の章の約半数にあたる53の章について、根本説一切有部の律蔵に並行話が見られることが明らかにされている。さらには、一部の物語について、並行する『根本説一切有部律』『薬事』所載の物語に、しばしば同じ語彙が使われていた可能性があることも指摘されている。

本研究で対象とした第27-38章についての材源をまとめると以下のようになる。

第27章「シュローナコーティヴィンシャ物語」(Śronakotīvimśāvadāna)、第28章「酔象調伏物語」(Dhanapālāvadāna)、第29章「カーシースンダラ物語」(Kāśīsundarāvadāna)、第30章「黄金の鹿(スヴァルナパールシュヴァ)物語」(Suvarṇapārśvāvadāna)、第31章「カリヤーナカーリン物語」(Kalyāṇakāryavadāna)は根本説一切有部が伝える律蔵の「破僧事」のそれぞれの物語と近似している。第38章「忍辱仙人物語」(Kṣāntiyadvadāna)は第29章の「カーシースンダラ物語」に説かれる「忍辱仙人」と内容の点ではほぼ同じであり、本章の材源は第29章の伝説と同様、「破僧事」と考えてよからう。また、第35章「ゴーシラ物語」

(Ghoṣilāvadāna)は『根本説一切有部毘奈耶』が伝える説話と、僅かの違いはあるものの、ほぼ一致する内容を伝えている。第36章「プールナ物語」(Pūrṇāvadāna)は『根本説一切有部毘奈耶』『薬事』の漢訳とチベット訳の伝説と内容が大筋で一致する。第37章「ムーカパンダ物語」(Mūkapaṅgavadāna)は『根本説一切有部毘奈耶』の説話に最も近似する。

ただし、第33章「ナンダとウパナンダ龍王物語」(Nandopanandāvadāna)、第34章「スダッタ長者物語」(Gṛhapatisudattāvadāna)のうち、両龍王とプラセーナジット王との説話と類似した内容は『根本説一切有部毘奈耶』に求めることができるが、スダッタ長者については、アングッタラ・ニカーヤ』(Aṅguttaranikāya)の「ヴェーラーマ経」(Velāmasutta)、もしくは漢訳『中阿含経』の「須達哆経」に認めることができる。僧伽提婆の訳出した『中阿含経』は、その原本がカシミールにおいてガンダーラ語で伝えられ、その帰属部派は説一切有部内の比較的古い伝承を保つ教団であるとされている。

以上に対し、並行話が現存資料に見られない説話もある。例えば、第32章の「ヴィシャーカ物語」(Viśākhāvadāna)の並行話は現存するサンスクリット、漢訳、チベット訳の聖典資料に見られず、どのような説話材源をクシェーメンドラが用いたのかは全く不明となっている。

このように、『アヴァダーナ・カルパラター』所載の物語には根本説一切有部律蔵が伝える物語を材源としていると考えられる物語が多数存在していることがわかる。しかし根本説一切有部の律蔵に並行話が存在する物語であっても、根本説一切有部の伝承と食い違う内容を伝えていることもある。また、『マハー・ヴァストゥ』のような説出世部が伝える文献に近似する物語が見られる例もある。

『アヴァダーナ・カルパラター』所載の物語と根本説一切有部が伝える物語とのこのような親疎性が、クシェーメンドラが複数の材源に基づいて『アヴァダーナ・カルパラター』を著したことによるものなのか、彼が用いた材源によるものなのかについて、にわかに結論を下すことはできない。しかしながら、クシェーメンドラが根本説一切有部の伝承に加え、説出世部の伝承も参照しながら『アヴァダーナ・カルパラター』を著していたことは可能性としては十分に考えられるであろう。あるいは一方で、クシェーメンドラが活動した時代には部派の意識が薄れ、その結果、諸部派が伝える説話を取り込んだ説話集が成立し、それをクシェーメンドラが材源として『アヴァダーナ・カルパラター』を著したという可能性も否定できない。『アヴァダーナ・カルパラター』の個々の章が伝える物語と聖典、聖典外の文献が伝える並行話とのさらなる比較研究が必要とされる。

(3) 『アヴァダーナ・カルパラター』を典拠とする美術作品について

カシミールで編纂された本文『アヴァダーナ・カルパラター』は、編纂者のクシェーメンドラが仏教説話図から着想を得てアヴァダーナの編纂に取り組んだとされるが、これまでにカシミールや、地理的に近く多くの仏教絵画が現存するラダック地方から、本作品を典拠とする美術作品の報告はない。いっぽうで、カシミールから離れたチベットでは、多様で非常に多くの美術作品が制作された。その多くはタンカと呼ばれる軸装の絵画に表されるが、中には木版画に着色する作品もあり、このために広く一般に流布した。寺院や宮殿や仏塔の壁画に表される例も多数あり、チベットにおいては最もよく知られた仏教説話図であると言ってよいだろう。

刊行した報告書において、共同で翻訳したテキストを参照しながら、『アヴァダーナ・カル

パラター』を典拠とするチベットの絵画作品について、どのように絵画化されているのかを具体的に検討して示した。ここでは概略を述べたい。

チベットにおいてクシェーメンドラの『アヴァダーナ・カルパラター』（チベット語：Byang chub sems pa' i rtogs pa brjod pa' i dpag bsam gyi ' khri shing）は13世紀にサンクリット語からチベット語に翻訳され、17世紀のダライ・ラマ5世の時代にチベット大蔵経論疏部に所収された。絵画の作例は非常に多く、媒体も様々で、寺院の壁画やタンカの画題となっている。チベットで絵画において『アヴァダーナ・カルパラター』が普及した理由の一つとして、所収される全ての物語を表した絵画のセットがあり、それが現代まで複製され続けたことが考えられる。現在見ることでできる寺院壁画やタンカの作例の多くは次の二種類の原画に基づく『アヴァダーナ・カルパラター』の絵画セットであることが判明した。すなわち、一つは、ナルタンで開版された版本からなる木版画のセットで、もう一つはチベット仏教カルマカギュ派の僧シトゥ・パンチェン・チューキ・ジュンネー（Si tu paN chen chos kyi ' byung gnas, 1699/1700-1774）によるタンカのセットである。ナルタンの木版画とシトゥ・パンチェンのタンカはいずれも、後世にこれらの原画をもとに、変更を加えることなく複製され、結果的に多くの作例を残すことになった。

これらのタンカは一幅で成立することではなく、複数で一具となり、木版画の例を取れば、31幅で一具となる作品となっている。108章ある物語をすべて表し、物語のいくつかの場面を抽出し、一幅のタンカに数話の物語を表すことが通例となっている。多くの場合に銘文を含むため、報告書において、タンカに記される銘文と『アヴァダーナ・カルパラター』の原文との比較を試み、報告した。

結果として、チベットの『アヴァダーナ・カルパラター』を典拠とするタンカ・セットはいずれも文献に基づいて表され、チベットの美術の特質の一つである、原典に忠実に従って絵画化する姿勢が見て取れた。さらには、銘文を検討すると、『アヴァダーナ・カルパラター』に述べられる原文の偈頌ではなく、上記の『アヴァダーナ・カルパラター』の材源について述べたように、根本説一切有部律蔵が伝える物語に説かれる内容が含まれていることが明らかとなった。また、絵画のモチーフの中にも、『アヴァダーナ・カルパラター』になく、根本説一切有部律蔵に登場するモチーフが見られることがあることも指摘した。チベットにおいては、豊富な仏教説話を有する根本説一切有部律蔵が説話文学の基本となっていて、その注釈だけでなく、絵画においても痕跡が見られることが明らかとなった。

(4) まとめ

以上のように、『アヴァダーナ・カルパラター』の原文翻訳を行い、並行する物語を所収する文献と保持された地域、部派、絵画における表現などを手掛かりにして検討した結果、物語の伝播の経路の一部が明らかになってきている。東南アジアへの伝播に関しては今後さらに研究を深めて発表する予定である。

引田弘道・大羽恵美・山崎一穂 『菩薩伝の如意の華鬘：ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター第27章—38章和訳』、あるむ、2022年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 引田弘道、大羽恵美	4. 巻 35
2. 論文標題 シュローナコーティヴィンシャ物語--『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』--第27章和訳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 119-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 引田弘道	4. 巻 50
2. 論文標題 仏陀の視線	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知学院大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 165-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 引田弘道、大羽恵美	4. 巻 34
2. 論文標題 酔象ダナバラ調伏物語--『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』--第28章和訳	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 111-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 引田弘道、大羽恵美	4. 巻 33
2. 論文標題 カーシスンダラ物語--『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』--第29章和訳	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 93-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 引田弘道、大羽恵美	4. 巻 48
2. 論文標題 黄金の鹿物語 『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第30章和訳	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛知学院大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 129-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 引田弘道	4. 巻 26
2. 論文標題 道徳教育と仏教説話	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本仏教教育学研究	6. 最初と最後の頁 143-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 大羽恵美
2. 発表標題 亀の捨身譚 KacchapavadanaとSuvaanakacchapajataka」
3. 学会等名 シンポジウム インド文化の東南アジアへの伝播
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 引田弘道
2. 発表標題 日本近現代巴利語文献研究
3. 学会等名 中国社会科学院世界宗教研究所(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 長野泰彦・森雅秀 編 大羽恵美(分担)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 398
3. 書名 チベットの宗教画像と信仰の世界	

1. 著者名 引田弘道・大羽恵美・山崎一穂	4. 発行年 2022年
2. 出版社 あるむ	5. 総ページ数 225
3. 書名 『菩薩伝の如意の華鬘：ポーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター第27章 38章和訳』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大羽 恵美 (Oba Emi) (50707685)	金沢大学・国際文化資源学研究センター・客員研究員 (13301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------